

# 認知症対応型グループホーム実習における看護学生の学びの実態

福岡 真理, 小楠 範子, 木村 孝子

## 要 旨

本研究の目的は、認知症対応型共同生活介護（以下、グループホーム）での実習における、看護学生の学びの実態を明らかにすることである。

研究参加者は、平成X年に老年看護実習を行った看護学科3年次生のうち、研究承諾を得られた40名である。老年看護実習終了後に自記式による質問紙調査を行った。調査内容は項目毎に分析し、自由記述については質的帰納的に分析を行った。

分析の結果、グループホーム実習における学びとして、＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞＜認知症の方との接し方の理解＞＜認知症の症状の理解＞＜医療機関との連携についての理解＞という4つが見出された。

生活を重視したグループホームでの実習では、生活を通して個性が見えやすく、＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞が得られやすい可能性が示唆された。また、4日間と限られた実習日数ではあっても、受持ち利用者を決め看護過程の展開を行うこと、さらに看護過程の展開にあたってセンター方式を活用することで＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞につながりやすいことが示唆された。

**キーワード：**老年看護実習、認知症、グループホーム、看護学生

## I. はじめに

日本における認知症有病率は、2015年に250万人、2025年は323万人にまで増加すると推計されている。この推計は医学的に認知症と診断された者ではなく、認定調査員による「認知症高齢者の日常生活自立度」データを基に推計されたものであり、加えて、要介護認定申請をしていない人が含まれていないことなどから、正確な患者数を反映しているとはいえないことが指摘されているが<sup>1)</sup>、認知症患者が増加している事実は否めないだろう。

これらの認知症患者の増加を反映し、老年看護学実習においても認知症高齢者を対象にした実習が展開されており、学生の学びの実態も報告されている。しかしながら、それらの多くは、介護老人福祉施設や介護老人保健施設で行われている実習に焦点があてられており<sup>2) 3) 4)</sup>、認知症対応型共同生活介護（以下、グループホーム）に焦点をあてたものはまだ少ない<sup>5) 6)</sup>。グループホームでの実習に焦点をあてた報告のうち、上野ら<sup>5)</sup>は、グループホームでの一日実習における学生の学びを分析している。また、木下ら<sup>6)</sup>は、グループホームで学生がレクリエーションや間食など利用者と同じ体験をする「利用者体験」を実習の一環として導入した教育効果と課題について報告している。いずれも、グルー

プホームで学生が何を学んだのかに焦点をあててはいるが、実習形態としては1日実習などの体験に留まっており、グループホームで看護過程を展開した学生の学びの実態に焦点をあてたものはまだ少ない。

本学の老年看護実習では、4日間と限られた日数ではあるが、グループホームでの実習を導入し、学生は受持ち利用者を決定し、看護過程の展開を行っている。

本研究の目的は、グループホームでの実習における学生の学びの実態を明らかにすることである。

## II. 研究方法

### 1. 研究方法

#### 1) 研究対象

平成X年度に老年看護実習を行った看護学科3年次生のうち、研究承諾を得られた40名。

#### 2) データ収集期間

平成X年9月～平成X+1年3月。

#### 3) データ収集方法および分析方法

老年看護実習終了後に自記式による質問紙調査を行った。

調査内容は項目毎に分析し、自由記述については質的帰納的に分析を行った。

### 2. 倫理的配慮

研究対象者には、研究目的と方法、プライバシーの保護、研究参加は自由意思であり、成績には一切影響のな

いことなどを文書と口頭にて説明を行い、文書による同意を得た。

### Ⅲ. 老年看護実習の展開方法

老年看護実習の実習期間は3週間であり、そのうちの4日間でグループホームでの実習を行っている。なお、老年看護実習前に、学生全員が成人基礎実習を終えている。

グループホーム実習では1名の利用者を受持ち、看護計画の立案、実施、評価の看護過程の一連を体験している。受持ち利用者のアセスメントと看護計画立案にあたってのツールには、「認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式」(以下、センター方式)をベースにしたものを用いている。これは、認知症の方の可能性に着目し、その人らしく生きていくための支援につなげていくためのツールであり、幾つかのシートから成り立っている<sup>10)</sup>。各シートは選択して利用することも可能であるため、4日間の実習期間にあわせて、シートを

選択し、学生が使いやすいように筆者らが一部改変したものを活用している。

臨地実習終了後は学内実習とし、グループホームその他、臨地実習でのまとめを行っている。実習のまとめでは、まず実習の振り返りを学生個人で行い、次にその学びをグループで共有する時間を設けている。グループホーム実習では、それぞれに受持った利用者の看護過程を振り返って事例としてまとめ、事例発表を行っている。事例発表の中で、学生相互で意見交換することで、認知症の人の尊厳を支える看護について多角的に考えることを目的としている。

### Ⅳ. 結 果

#### 1. グループホーム実習における学生の自己評価

実習目標を踏まえた上で、グループホーム実習における自己評価項目を17項目設け、5段階での評価を行ったところ、表1の結果が得られた。

「受持ち利用者を理解するための必要な情報を収集で

表1 グループホーム実習における学生の自己評価

N=40

|  | とても<br>そう思う | やや<br>そう思う | ふつう       | ややそう<br>思わない | ほとんど<br>そう思わない |
|--|-------------|------------|-----------|--------------|----------------|
| 1 グループホームの役割と法的位置づけ、サービス内容について理解する                     | 10人 (25%)   | 24人 (60%)  | 6人 (15%)  | 0人 (0%)      | 0人 (0%)        |
| 2 健康状態の把握と異常時の対応について理解する                               | 9 (22.5)    | 24 (60)    | 7 (17.5)  | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 3 医療福祉機関との連携体制について理解する                                 | 3 (7.5)     | 20 (50)    | 17 (42.5) | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 4 家族・地域との交流について理解する                                    | 12 (30)     | 19 (47.5)  | 8 (20)    | 1 (2.5)      | 0 (0)          |
| 5 グループホームを利用する高齢者の特性を理解する                              | 21 (52.5)   | 18 (45)    | 1 (2.5)   | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 6 認知症高齢者の中核症状について理解する                                  | 18 (45)     | 21 (52.5)  | 1 (2.5)   | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 7 認知症高齢者のBPSD(周辺症状)について理解する                            | 16 (40)     | 21 (52.5)  | 3 (7.5)   | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 8 グループホームの利用者とコミュニケーションを中心としてかかわることができる                | 23 (57.5)   | 17 (42.5)  | 0 (0)     | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 9 グループホームの利用者の健康状態を把握することができる                          | 8 (20)      | 26 (65)    | 6 (15)    | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 10 利用者とのコミュニケーションおよび生活援助を通し、利用者が安心できるかかわりについて考えることができる | 19 (47.5)   | 18 (45)    | 3 (7.5)   | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 11 利用者とのコミュニケーションおよび生活援助を通し、利用者が安心できるかかわりについて考え、実践できる  | 13 (32.5)   | 22 (55)    | 5 (12.5)  | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 12 認知症高齢者とのかかわり場面における自己のコミュニケーションの特性について理解できる          | 8 (20)      | 23 (57.5)  | 9 (22.5)  | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 13 認知症高齢者の意思決定を尊重し、その人らしく生きることを支えるケアについて理解できる          | 18 (45)     | 22 (55)    | 0 (0)     | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 14 受持ち利用者を理解するために必要な情報を収集できる                           | 9 (22.5)    | 25 (62.5)  | 5 (12.5)  | 1 (2.5)      | 0 (0)          |
| 15 収集した情報をアセスメントし、ケア計画の立案ができる                          | 6 (15)      | 19 (47.5)  | 15 (37.5) | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 16 ケア計画に基づいて受持ち利用者に必要なケアが実践できる                         | 8 (20)      | 20 (50)    | 12 (30)   | 0 (0)        | 0 (0)          |
| 17 ケアの結果、目標が達成できたか評価できる                                | 6 (15)      | 20 (50)    | 14 (35)   | 0 (0)        | 0 (0)          |

きる」「家族・地域との交流について理解する」の2項目について、「ややそう思わない」と回答した者がそれぞれ1名(2.5%)であった。その他の項目は、「とてもそう思う」「ややそう思う」「ふつう」のいずれかの評価であった。

「とてもそう思う」の評価が半数以上を占めた項目は、「グループホームの利用者とコミュニケーションを中心としてかかわることができる」23名(57.5%)、「グループホームを利用する高齢者の特性を理解する」21名(52.5%)の2項目であった。

## 2. グループホームにおける学び;今後の看護へのつながり

「グループホームで学んだことは今後の看護に役立つと思うか」の問いには、30名(75%)が「とてもそう思う」と回答し、10名(25%)が「ややそう思う」と回答した。

グループホームでのどのような学びが今後の看護に役立つと思ったのか、自由記述で回答を求めたところ40名中39名から回答が得られた。

それらの自由記述を分析した結果、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解><認知症の方との接し方の理解><認知症の症状の理解><医療機関との連携についての理解>という大きく4つの学びが見出された。

<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>とは、その方の生活史を汲み取る看護の視点を持ち、そこから「その方ができること」を発見していくこと。さらに「その方ができること」が発揮される環境を整えることの大切さを理解することである。学生は、高齢者の生活史はそれぞれであり、「その方ができること」もそれぞれに異なることを実感し、個別にアプローチしながら、「その方ができること」を発見していくことの重要性を実感していた。そして、高齢者の笑顔がケアの指標の一つとなり得ることを学んでいた。

<認知症の方との接し方の理解>とは、教科書上で表面的に理解していた認知症の方との接し方を実際に実践してみることで体験的に理解できたことを指している。実習でのかかわりでは、学生の言動に対して実際に認知症の方の反応が返ってくるため(無反応である場合も含め)、学生は自分自身のコミュニケーションのありようや認知症の方を尊重したかかわりについて考えざるを得ず、戸惑いながらも認知症の方との接し方の基本を学んでいた。

<認知症の症状の理解>とは、教科書に記載している認知症の症状の基本について、実際の認知症の方のかかわりを通して学んだことを指している。しかし、学生は単なる認知症の症状の理解に留まらず、症状を理解した上で、その方の残存機能を生かしたケアについて考え

ていた。

<医療機関との連携についての理解>とは、グループホームが医療機関とどのような連携をとっているのかを実際の事例を通して学んだことを指している。看護師としての卒業後の就職先を病院とイメージしている学生は、病院側の立場で認知症の高齢者を受け入れる自身の姿を描いており、グループホームと医療機関との連携についての学びは、看護師としての自分自身の将来に役立つものとしてとらえていた。

## 考 察

### 1. <その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>に至った背景

本研究においてグループホームにおける学生の学びを分析したところ、4つの学びが見出されたが、そのうち、<認知症の方との接し方の理解><認知症の症状の理解><医療機関との連携についての理解>については、上野ら<sup>5)</sup>が行った認知症高齢者グループホームでの1日実習における看護学生の学びの研究と同様の結果であった。これらのことから、<認知症の方との接し方の理解><認知症の症状の理解><医療機関との連携についての理解>の3つについては、実習日数に関係なく、1日実習でも学習できるものといえるだろう。

一方、本研究においては、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>も学びの一つとして見出された。これは、1日実習に焦点をあてている上野ら<sup>5)</sup>の研究結果には見られなかったものであり、本研究独自のものと思われる。ここでは、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>に焦点をあて、考察していく。

学生の認知症高齢者の理解プロセスに焦点をあてた松田ら<sup>7)</sup>の研究では、学生は介護老人保健施設で実習を行い、3週間の実習期間で1名の認知症高齢者を受け持っている。そこでは学生が、1週目に<関わりに困惑する><関わりする方法を模索する>というプロセスを経て、2週目に認知症高齢者への個別的なケアのポイントを発見していたことが報告されている。本研究においても4日間の実習を通して学生は<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>を会得しており、認知症高齢者と関係性を築き、個別性をとらえたケアの実践にいたるまでには一定期間が必要であることを示しているといえる。

しかしながら、松田ら<sup>7)</sup>の研究では、学生が認知症高齢者の個別的なケアのポイントを見出しているのは実習2週目頃からである。一方、本研究では、4日間の実習期間中の学びとして<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>が得られている。松田らと比較すると短期間で<その人らしく生きることを支

える個別性の看護の重要性の理解>が得られたこととなる。

この理由として、まず第一に学生の実習場所の違いがあげられるだろう。松田らの研究では対象となる学生の実習場所が介護老人保健施設である。介護老人保健施設は介護保険の中の施設サービスであり、家庭復帰と療養機能をもちあわせている。対象者は、入院治療の必要はないもののリハビリテーションと介護を必要とする者である。職員配置は、利用者100名あたり、常勤医師1名、看護職員9名、介護職員25名、その他理学療法士などとなっている<sup>8)</sup>。一方、グループホームは、介護保険の中の地域密着型サービスに位置づけられており、認知症の高齢者が対象となっている。職員配置は、利用者3名に対し、介護職員1名となっている<sup>9)</sup>。職員配置の面からみても、医師、看護師の配置が必須になっていないグループホームは、介護老人保健施設に比べると、医療依存度が低く、生活を重視したサービスであることが読み取れる。本研究の対象となった学生の実習場所は生活を重視したグループホームであったため、生活を通してより個別性が見えやすく、松田ら<sup>7)</sup>の研究結果と比較すると短期間で、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>が得られたのではないかと考えられる。

2つめの理由として、本学の実習では4日間と限られた日数ではあるが、受持ち利用者をもち看護過程の展開を行っていることがあげられるだろう。本学の実習では、受持ち利用者のアセスメントと看護計画立案にあたってのツールとして、センター方式をベースにしたものを用いている。センター方式は、認知症になっても本人がそれまで通り自分の人生の主人公として暮らし、尊厳が支えられることを目指している<sup>10)</sup>。そのため、センター方式で活用される書式は、認知症をもつ本人を主語とした文章で作成されるという特徴がある。学生は、センター方式のシートに認知症の方を主語とした文章でその思いや願いを記入することで、4日間という限られた日数であっても、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>につながりやすかったのではないだろうか。

また、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>には、個別にアプローチしながら、「その方ができること」を支援していくことも含まれていた。1人の認知症高齢者の方を受け持ち、個別にかかわりながら「その方ができること」を見出し、それを支援するプロセスにおいては、「その方ができること」を今したいのか、あるいは別の時にしたいのかなど、認知症の方が自分の意志を表現できる環境づくりも重要となる。「尊厳に配慮したケアとは倫理的側面に配慮したケアであり、それは高齢者の自律を尊重し、自立を適切に支援す

ることである」<sup>11)</sup>といわれているが、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>が学びとして見出されたということは、学生が実習をとおして、認知症の方の尊厳を支える看護についても考えることができたことを示しているだろう。グループホームでの4日間の実習終了後、学内において受け持ち事例についてまとめ、事例発表を行っているが、認知症の方の尊厳を支える看護について多角的に考えることを目的として行っている事例発表の一定の効果が示されたともいえる。

## 2. 今後の実習展開における課題

学生の自己評価を集計した結果、「受持ち利用者を理解するための必要な情報を収集できる」「家族・地域との交流について理解する」の2項目について、「ややそう思わない」と回答した者がそれぞれ1名(2.5%)であった。必要な情報収集ができなかったことについては、実習期間が4日間で、看護過程を展開していく早さに対応できず、不全感を感じた可能性が考えられる。学生の学ぶスピード、学習意欲には個人差があるため、教員は、それぞれの個別性を捉えた上で指導を行っていく必要があるだろう。また、家族・地域との交流については、4日間の実習の中で体験できず、そのときの施設、利用者の状況によって、学生の体験に偏りが生じたのではないかと考えられる。そのため、実際に体験できなかったことは、施設のスタッフから、伝えていってもらうように働きかけるなどの工夫も求められる。

また、先の考察において、本研究の対象となった学生の実習場所は生活を重視したグループホームであったため、生活を通してより個別性が見えやすく、松田ら<sup>7)</sup>の研究結果と比較すると短期間で、<その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解>が得られたのではないかということを示した。このことは、生活を重視したグループホームでの実習では、学生の視点が高齢者の生活面に向けられやすく、健康面に視点が向きにくいことも示しているともいえる。高齢者の健康面のアセスメントは、看護展開を行ううえで欠かせないため、教員側の指導も求められる。医療依存度の低いグループホームでの実習展開にあたっては、学生が高齢者の生活と健康の両面に焦点をあて、看護展開を行うことができる工夫が重要になると思われる。

## VI. まとめ

グループホームでの実習における学生の学びの実態を明らかにすることを目的に研究を行った。

その結果、「グループホームの利用者とコミュニケーションを中心としてかかわることができる」、「グループホームを利用する高齢者の特性を理解する」という項目については学生の自己評価が高いことが明らかとなっ



た。また、自由記述の分析からグループホームにおける学びを検討したところ、＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞など大きく4つの学びが見出された。

この結果をうけ、＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞に至った背景を考察した。生活を重視したグループホームでの実習では、生活を通して個別性が見えやすく、＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞が得られやすい可能性が示唆された。また、4日間と限られた実習日数ではあっても、受持ち利用者を決め看護過程の展開を行うこと、さらに看護過程の展開にあたってセンター方式を活用することで＜その人らしく生きることを支える個別性の看護の重要性の理解＞につながりやすいことが示唆された。

#### Ⅶ. 研究の限界と課題

本研究結果は平成X年度の3年生40名から導き出されたものであり、一般化には限界がある。今後も継続して調査し、学生の学びに加え、実習展開の工夫とその効果についても研究を行っていく必要がある。

#### 謝 辞

本研究にご協力くださいました対象者の皆様に感謝いたします。

なお、本研究の一部は第12回日本認知症ケア学会において発表した。

#### 文 献

- 1) 厚生労働省：認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト，認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト報告書，2008
- 2) 野崎玲子，長澤久美子：高齢者の施設実習における認知症看護に関する学び．感染防止 20 (5)：41－48，2010
- 3) 中野雅子：認知症高齢者との交流場面における看護学生の心的特徴．滋賀医科大学看護学ジャーナル 8 (1)：34－37，2010
- 4) 千葉京子：介護老人保健施設実習における認知症高齢者ケアの学び．日本赤十字武蔵野短期大学紀要 18：43－49，2005
- 5) 上野まり，廣川聖子，間瀬由記，白水真理子：認知症グループホームでの一日実習における看護学生の学び（第1報）学生の実習記録から．神奈川県立保健福祉大学誌 6 (1)：3-11，2009
- 6) 木下香織，古城幸子，馬本智恵：老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題．看護・保健科学研究誌 8 (1)：169-176，2008
- 7) 松田千登勢，長畑多代：老年看護学実習における学生の痴呆性高齢者の理解プロセス．大阪府立看護大学紀要 10 (1)：43-50，2004
- 8) 岡庭豊：サブノート保健医療論・公衆衛生学．第33版，メディックメディア，東京，2010
- 9) 厚生労働省 指定地域密着型サービスの事業の人員，設備及び運営に関する基準 <http://law.e-gov.go.jp/H18/H18F19001000034.html>
- 10) 永田久美子，小森由美子，熊倉祐子：センター方式が目指すもの．認知症介護研究・研修東京，大府，仙台センター編：認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式の使い方・活かし方．認知症介護研究・研修東京センター，東京，2011，16-45
- 11) 箕岡真子：認知症ケアの倫理．第1版，ワールドプランニング，東京，2010

## Nursing Students' Learning in Practical Training at a Group Home Accommodating Patients with Dementia

Mari Fukuoka, Noriko Ogusu, Takako Kimura

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words: practical training on geriatric nursing, dementia, group home, nursing students

### Abstract

The purpose of this study is to clarify what the nursing students actually learned during their practical training at a facility where patients with dementia live together (hereafter group home).

Study participants are 40 junior students of the nursing department who gave consent for cooperating the study from among those who completed practical training of geriatric nursing in 20XX. After the practical training on geriatric nursing, we asked them to answer a written questionnaire. The answers were analyzed item by item, while free comments were analyzed qualitatively and inductively.

Our analysis found that the learning acquired by the students during the training at the group home included understanding on: 1) importance of individuality in caring so as to support each patient to live his/her own life, 2) how to deal with patients with dementia, 3) dementia symptoms, and 4) cooperation with medical facilities.

Practical training at a group home that provides a family-like environment facilitates observing each patient's individuality through their everyday living. It was suggested that such training may prove to be an opportunity "to understand the importance of individuality in caring so as to support each patient to live his/her own life." It was also suggested that even during the limited time of four days, dealing with a designated patient to lay out nursing process as well as utilizing the Center Method to Support Persons with Dementia for laying out nursing process help them acquire "understanding of the importance of individuality in caring so as to support each patient to live his/her own life."

---